

2016 年（平成 28 年）5 月 23 日（月）
第 28 回霧ヶ峰自然環境保全協議会 資料

霧ヶ峰延焼地影響調査（2015 年度 経過報告）

1 概要

2013 年（平成 25 年）4 月に霧ヶ峰で生じた火入れの延焼による生態系（植生・鳥類・昆虫類・気象等）への影響を評価するため、環境保全研究所の経常研究の一環として経年観測（モニタリング）を実施中。

2014 年（平成 26 年）度までの調査では、(1)延焼地では枯草の量が減って非延焼地よりも緑におおわれる時期が早くなる傾向があり、(2)鳥やチョウで草原性の種が多く確認された。このことから、延焼が草原環境の拡大に一定の効果をもったと考えられた。ただし悪影響がなかったかどうかについては、延焼前のデータがないため不明。

2015 年（平成 26 年）は、定点自動撮影カメラによる草原の季節変化（新緑等の時期）の調査、および昆虫（チョウ類）目視による調査を実施。

2 調査の実施期間

2013 年（平成 25 年）5 月から 5 か年程度（調査結果に応じて期間を検討）の予定。

3 調査地

霧ヶ峰高原（茅野市から諏訪市）の火入れ地・延焼地および隣接する非延焼地（下の写真を参照）



図．調査位置図（空中写真の撮影は 2013 年、調査項目は 2015 年のもの）

4 調査内容と方法

調査項目	調査内容と方法	進捗状況
季節変化	・草原の新緑等の時期：定点自動撮影 (延焼地・非延焼地の比較)	・定時に自動撮影 (2014年4月から)
動物相調査	・チョウ類：目視による現地調査 (火入れ地～延焼地)	・2015年6月25日・8月5日に 計2回調査を実施
物理環境	・観測機器を設置 延焼地／非延焼地：2地点での観測	・気温・地温・土壌水分・反射日射を 測定(2013年9月から)

5 2015年度(延焼2年後)の調査結果と考察

(季節変化) 定点自動撮影の画像により草原景観の季節変化を比較した結果、5月中においては非延焼地のほうが延焼地よりも緑色が認められた。この違いは、枯草とササの密度の差を主に反映している可能性がある。6月以降は差が不明瞭となった。レンゲツツジの開花は、2014年と異なり延焼地においても比較的多く確認された。

(動物相) チョウ類の種構成は2013年・2014年に似た傾向が見られた。草原性の種が多く確認され、森林性の種が少数確認された。霧ヶ峰で通常多く見られる種のほか、レッドリスト掲載種3種が確認された。

(物理環境) 現時点までの解析では、延焼地と非延焼地のちがいは明瞭ではない。

(今後の予定) 延焼による季節変化・動植物種・物理環境等への影響は経年的に変化する可能性がある。その影響を把握するため、継続して調査を行う予定である。